

順之に於ける一円相思想

韓 基 斗

1

禪が仏教の教学を超え、その独自性を發揮する九世紀に入ると、如来禪の禪学から祖師禪の日常平凡な禅生活を強調して来る。これが馬祖（七〇九―七八八）以後、南泉（七四八―八三四）趙州（七七八―八九七）潯山（七七一―八五三）仰山（八〇三―八八七）等の禪風であった。

祖師禪が登場したあと、禪が中国人の生活に土着化したといえるが、今までの宗教的信仰はその表層から隠れ新しい価値基準を模索する時代になる。その一端として一円相思想を強調した時代があった。禪から始まる一円相象徴の発端は「一物」という言葉からであろう。この一物を肯定的に有一物と言ひ、否定的に無一物と言ひ発想を一円相にもとめると相対的二元的な問題が一つに合致し、非常に理想的であり便利な表現方式と見たからであろう。「有一物」「無一物」は八世紀後半の流行語であったと言えるが皆な六祖慧能に關係す

る開悟心境として表現している。

「無一物」とは、祖堂集以後の記録にある神秀偈頌の対偈頌「本来無一物、何処有塵埃」によるがこれから相対的対立観を禁じ一相もない不立文字の表現法として「以字不成八字不是」という端的な意味表現を一円相で示した。しかし、この否定的側面の唯一面では無意味な *sketchism* になつてしまふので無一物に対し「有一物」の表現がまた出た。慧能が南嶽懷讓に与えた一物に対する公案を十二年間研磨したあと「設使一物即不中」と云ひ、また、涵虚已和の金剛經說誼の序文に一円相を画き「有一物於此^①」として一円相を説明している。この一物は相対的現実、特に仏も凡夫も皆、この一物である―即ち一円相の中に含有するということで、二元論的相対世界を一つに集める論理的避難所になつてしまふのではなからうか。いずれ教學においては起信論を中心として相対的現実・菩提と煩惱の本来が相即するといふ論理をうまく解決するが禪ではこの二元性を見性するほか論理的に解決す

ることは不可能でありまたあるとすれば黄葉止啼の方便を越えていない。それで一円相のなかにある仏の菩提と衆生の煩惱を論理的避難所から脱皮しどう克服するのかが一大問題であった。

2

この解答として五官山の順之は一円相の中に牛を示して衆生の煩惱が仏の菩提に変化する方法を提示し、二元的論理を克服する。

禅宗史書の最古本である祖堂集の巻二十を見ると、仰山慧寂（八〇三—八八七）の法嗣、五官山順之（八五八—唐—八七四—唐—八七五）の項目が破格的な扱いで、ほぼ二十四枚にわたって記録されている。不思議にも順之は帰国した後、黄海道、五官山、瑞雲寺で開山した人でありながら韓国の禅宗史書には載っていない。しかし中国の禅録には祖堂集を中心として景德伝燈録卷十二、人天眼目瀉仰宗の玄問玄答条、五燈会元卷九、五家嚴統卷九等、諸禅録に入っている。順之は中国通の僧侶であり、当時、故国では理解されなかった和尚ではなかろうか。忽滑谷快天氏は仰山以後、円相を濫用した問題と、人天眼目に円相の「六名」の説明とか順之の玄問玄答を書いていることに対して、「妄議」にほかならずと批判している³。たしかに「妄議」であると「批判」するべきか？

順之に於ける一円相思想（韓）

しかし禅の歴史は順之の思想を通じて展開したので、まず一度理解する必要がある。祖堂集卷二十には一円相の本質を「相雖不異・迷悟不同」として二元的要素を一円相に含め、迷悟の差を具体化している。即ち凡夫から聖人になる方法を具体化した面で高く評価したい。

順之は一円相の体系として、牛・人・仏の三面を分けて見る。これは華嚴経にある心・仏・衆生・三無差別^④という理念を現実に実現するため、心の譬喩「牛」を一円相による牧牛の道として第一話の四対八相があり、衆生の譬喩「人」を一円相による修道の道として第二話の兩対四相があり。修行の究極の譬喩「仏」が一円相によって人間化する第三話の四対五相に対して説明している。これは元代に入って牧牛図の禅絵を開拓した源泉になり成仏の理想を現実に説明する重要な方法論に違いない。

3

【1】第一話、円相と牛、四対八相、○↓④、○轟↓④、④⑤↓④、○牛↓④、仰山の師瀉山が遷化すると仮定して次のような公案を示した。

師臨遷化時・示衆曰・老僧死後去山下・作一頭・水牯牛・脇上書兩行字云「瀉山僧某某甲」与摩時喚作水牯牛・喚作瀉山僧某某甲・若喚作瀉山僧又是一頭水牯牛・若喚作水牯牛又是瀉山僧某專

甲汝諸人作麼生。」

この水牯牛に関する解答は各人各色であった。特に後代に編輯された禪録、五燈嚴統（一六五三年製）に要約しているのを見ると次のようである。

「仰山出礼拜而退之、雲居膺代曰師異号・資福曰、当時但作此○相拓呈之・新羅和尚（順之）作此⊕相拓呈之」この新羅和尚（順之）が⊕を呈げたことは瀉山の公案に徹底したことであり、また傳灯録の仰山条にある「瀉山の牧牛」という話はこの水牯牛の話しから来たのが確實であり、牧牛思想の源泉として順之は⊕と見たのである。凡そ仏子とは牧牛するによつて仏道に入門すべきである。しかしその路程は当時禅と教の二門に分かれていた。それで同じ⊕でも見性成仏する禅の面と、会三帰一する教の面とを区別して説明する。見性成仏する面で見ると、一円相は涅槃相であり理仏性相であることを悟りそこから忍耐しながら仏法の道を行くので、涅槃經にある偈「雪山有草・名為忍辱、若牛食則出醍醐」の意味として⊕を忍草成仏の象徴とする。これが○から⊕に至る見性成仏の道と見るのである（理論仏から実践仏になる通とも云う）。一方、教の面から見れば三牛（○犇）が一牛となつて一円相内に入っている状態を意味する（○犇↓⊕）。三牛とは仏教の三乗で法華經の会三帰一を象徴し、また一牛は露地白牛の意味である。

以上、見性成仏する禅的一牛は華嚴の文殊・普賢の菩薩行から導入し教的一牛は法華の白牛一乗から導入したのである。その共通点は、空虚な未開拓の一円から牧牛する道に入ることでありう。

さらに、また水牯牛の話を繰り返して見よ。瀉山の同時代にあった道伴・南泉普願（七四八―八三四）趙州從諗（七七八―八九七）曹山本寂（八四〇―九〇二）等がよく使い流行された禅話、水牯牛の話にある性格を調べて見ると次の二つの問題のため対論した禅話である。

(1) 人生の負債を報答する道として賦役する水牯牛。

(2) 凡夫から仏に至るまで精進し牧牛する水牯牛。

この二類であった。この二つの課題は当時僧侶達の重要関心事であった。順之も例外なく負債を報答する賦役する水牯牛と牧牛する水牯牛を分けて示した。前者は牛が円相の前に立ち円相を引く相（牛○）である。水牯牛の作業は、福を引き、因円果満になる結果を持ち（牛○↓⊕）福徳を受けるための努力する（契果修因相）状態になる。また後者の意味として順之は、仏に至る精進として牧牛の水牯牛を思いみる。牛は人によつてうまく訓練される時、牛の価値を得るからである。真空の標準である円相を前に置き、それによつて訓練する（○牛）は、今まで自身を支配した慾に煩惱を忍耐する菩薩の行によつて、自心を降魔し自由にする王様の能力

(㊤)を得る。これは、体験によって実際の世界を次第に証得する(漸証實際相)状態という。

【2】第二話、円相と人、兩対四相、牛①↓②、③牛↓④、牛によって円相の内にある人間、即ち正しい人間(㊤)を発見するにはいままでもあった牛の形態がなくなつたあとと可能である。いままで働らいた牛は人の前にある型(牛③)と人の後にある型(④牛)と分けて示される。人の前にある型は人を運載する意味即ち「乗」の象徴で、特に法華經の一乗を象徴する。しかし一乗の思想も禪の立場で見ると、依教する教学の病根が残っているから、その教学の觀念即ち「想解」を除去するのが課題になる。そうして、人の前にあつた牛を除去した④は識本還源相と云う。また牛が人の後にある型(④牛)は牛が人に依存する形態で他力的浄土仏教の方便を意味する。これは驢馬に乗って驢馬をさがす愚である。いつか自己の本來か仏であることを自覚する時、かならず牛を除去し、自立する正しい人間が残る、形に影がつくような迷妄から解放する相という。以上の兩対四相は、牛にあつた習慣的觀念を除去すると本來の自己が残る状態になることを示している。

【3】第三話、一円相と仏、四対五相、(…○↓△)↓④↓
第二話においては人までを除去して自己追究の不足面を補充すれば、まったく煩惱のない一円相そのままになる。一円

順之に於ける一円相思想(韓)

相は牛と人が除去されたあとと分別のない謂ゆる把玉覓契する相であると示す。またこの円相を証得し經驗すると、円相の内に無私の主心として某(㊤)が現われる。この無私の主心が続く時、正しい主人||仏が現われる。これを「続いて宝器を成す相(㊤)」と云う。この仏はまたその本来が、社会に広く育てる風土が必要であり、また歴史的に永く伝えながら培養する土壌(㊤)が必要である。これを「玄印旨相」と云う。

以上、順之の「一円相と牛・人・仏につなぐ思想」は、衆生から聖人に至るまでの成仏への図表であり、元代以後に流布された十牛図とも深い関係がある。この項十牛図は十種以上流布されているが、その中、廓庵師遠の十牛図と比較すると様々な類似面と問題になる点とがある。

(1)順之の第一話にある「㊤」と廓庵の「得牛」。この両面はその牧牛する精神は互に一致する。しかし廓庵の得牛に至る道は(尋牛・見跡・見牛)の順に一糸不乱になるが、順之は理仏性の円(理論的真理)から実践的仏性(見性成仏)に至る道(○↓㊤)と、三乗から一乗になる道(○犇↓㊤)とに分けて示している。

(2)廓庵の十牛図は得牛したあと、唯、牧牛に入るが順之は牛をはたらかせて大事を成就し(㊤)また牧牛して降魔(㊤)して行く両面を提示している。

一八七

つたことと廓庵の十牛図第七忘牛存人。廓庵はその第五牧牛の成就として第六騎牛帰家しそれで牛までとられ第七の忘牛存人になるが順之の一円相には依教する牛と依他浄土する牛が各々とられ唯人が残っている状態を、第二話に説明している。廓庵は本家をさがし、順之は依教・依他のない本分に帰って円相の内に人が残る状態である。

(4) 順之の第三話、人、牛がなくなつたことと、廓庵の十牛図第八人牛俱忘。廓庵は第七図まで、人と牛を分別して修養した結果、第八図には、人牛共になくなる。順之においても第三話で人牛共になくなつたあと一円相が現前する。しかし漸次的に部分の円相が全体の円相になりそれから無私の主人を得るといふ順序を見ると順之は漸修証を強調したのである。

以上、廓庵の十牛図は牧牛する一心の連結であり、閑人の修養路を示した特徴がある。しかし順之の一円相では禅と教・華嚴と法華、また一乗教学と浄土・依地等、二元的性格を予想して展開した。そのあと一円相によって一致する思想の展開である。しかし相対的の一致の一円相思想は当時仏教社会に理解されたかどうが疑問である。

1 「以字不成・八字不是」の公案を禅林僧宝伝には巻四にある漳州羅漢桂琛（雪峰の法嗣）が對話主題に使つたが景德伝燈録には巻十二ある五観山順支が一円相を示顯する質問であつた。

- 2 無学の法嗣涵虚已和（一三七六一—一四三三）が金剛般若經五家解を作り、その序文に一円相を画き「有一物於此從來以來・形不得狀不得」^①と説明している。
- 3 祖堂集卷二十 柳田聖山本三七〇頁には「五官山瑞雲寺和尚順之」と云い、景德伝燈録卷十二新文豊版221頁には五観山順支というが祖堂集が古本であるからその資料に従う。
- 4 忽滑谷快天著「禅学思想史」上553頁—555頁。
- 5 祖堂集卷二十 307頁下。
- 6 〇此相者・所依涅槃相・亦名理仏性相・与群生衆聖皆依此相・相雖不異・迷悟不同故有凡夫有聖。
- 7 華嚴經夜摩天宮品參照。
- 8 祖堂集卷第十六306頁下。
- 9 五燈嚴統に水牯牛に対する答は原始性が認められないが順之の④が歴史に流行されたことが理解される。
- 10 祖堂集卷十六南泉和尚条298頁に曹山との對話で水牯牛になつて負債を報う話と千項寺の院主との對話で精進向上する象徴としての水牯牛の禪話がある。この代表的禪話以外にも以上のように二つの比喻によつて使つた。
- 11 祖堂集卷二十、三七二頁上。
- 12 祖堂集卷二十、三七三上下。
- 13 祖堂集卷二十、三七四上。
- 14 祖堂集卷二十、三七四上。
- 15 祖堂集卷二十、三七四上。
- 16 廓庵師遠は臨済宗楊岐派であり大随元静に嗣法した人である十牛図によつて有名になつた普燈録十七、五燈会之二十、続伝燈三〇參照。
- 17 廓庵師遠は臨済宗楊岐派であり大随元静に嗣法した人である十牛図によつて有名になつた普燈録十七、五燈会之二十、続伝燈三〇參照。

（円光大学教授・哲博）